

路面電車の通る街

大谷英理子

* 登場人物

吉田久美 (45)	主婦
高林文江 (73)	久美の母
下村千恵子 (65)	市電沿線の住民
高林孝之 (49)	久美の兄
高林由紀 (47)	久美の義姉
吉田昭夫 (45)	久美の夫
吉田奈美 (17)	久美の娘

* あらすじ

札幌出身の吉田久美(45)は、十八の時
大学進学で北海道を離れてからずっと東京で
暮らしている。夫と娘と三人で平凡に暮らし
ていた久美だが、ある日、娘の奈美が学校に
行かず引きこもり状態になってしまう。心を
閉ざしたままの奈美に、親としてどう接して
いいかわからない久美。三年の月日だけが
たずらに経っていった。そんな時、父親の法
事で実家に帰ることになった久美は、母、文
江(73)と久しぶりに再会をする。が、久
美の胸中は複雑だった。久美もまた、母に対
して心を開けない子供時代があったのだ。若
い頃、心を病んでいた文江は、幼い久美を連
れて路面電車で病院に通う日々を送っていた。

ある日、心身を喪失した文江が線路を歩い
ていると、前から電車が……。その時のこと
がトラウマになり大人になった久美を苦しめ
る。

母は私と一緒に死のうとしたのか。幼い
日の記憶をたどり、久美は一人路面電車で短
い旅に出た。

電話のベルが鳴っている

久美「札幌の気温は22度か……半袖でいいかなあ……はいはい、今出ます」

SE 受話器を取る。

久美「はい、吉田です」

文江「(電話の向こう) 久美かい、明日の飛行機、何時だっけ？」

久美「あ、お母さん。11時に羽田だけど」

文江「じゃあ札幌は1時半頃だね。駅の西口まで迎えに行こうと思って」

久美「いいわよ、迎えなんて。子供じゃないんだから」

SE ドアが開く

久美「どうしたの？ 奈美ちゃん」

SE ドアがきつく閉まる

久美「奈美ちゃん！」

文江「どうかしたのかい？ 奈美」

久美「うううん、なんでもない」

文江「明日奈美も来るんだよね」

久美「あの子は行けないわ。用事があって」

文江「そうかい、残念だねえ」

久美「じゃあ明日。おやすみなさい」

SE 受話器を置く。

久美「(ため息)」

SE 襖を開閉音

昭夫「お義母さんか？」

久美「ええ。起こしちゃってごめんね」

昭夫「なんだって？」

久美「駅まで迎えに来るって。子供じゃないのにね」

昭夫「親にとっては、幾つになっても子供は子供のさ」

久美「そうかもしれない……あなた、奈美のことお願いね」

昭夫「ああ、分かっている。たまには親孝行してこいよ」

久美「親孝行か……行かなきゃダメかな、やっぱり私」

昭夫「奈美のことは大丈夫だから」

久美「月曜の午後には帰るわ。おやすみなさい」

昭夫「おやすみ」

SE 電気を消す

久美N「中学生だった奈美が学校に行かなくなってきたらもうすぐ3年になる。部屋にこもったきり何を考えているのかさえもわからないが、時おり聞こえてくるオルゴール

の音色が、私にはあの子の息遣いのように感じる」

の音色が、私にはあの子の息遣いのように感じる」

SE オルゴールの調べ流れて

久美「奈美、何バカなことしてるの！ 手首なんて切って！ やめなさい、奈美！」

久美N「手首の傷が消えてもあの子の心の傷が癒えることがあるのだろうか。ほとんど部屋から出ないまま、奈美は今年十七になる」

SE オルゴールの調べ (FO)

SE 遠くから路面電車の走行音

久美N「その晩、私はまたあの夢を見た」

子どもの久美「お母さん、電車が来るよ」

SE 路面電車がだんだん近づいて

ブレイキ音と警笛

久美「(うなされて)お母さん……お母さん！」

SE 警笛 大きくなって

久美「ひっ！」

SE 布団から跳ね起きる

新聞配達のパイク音

久美「なぜいつも同じ夢ばかり見るのだろう……」

SE 小鳥の声・階段を上り

ドアをノックする音

久美「奈美ちゃん、お母さん行ってくるわ。

……聞こえてる？奈美？」

SE 部屋の中でコトツという物音。

久美「行ってきました……」

SE 階段を下りる久美の足音が止まる
かすかに聞こえるオルゴール

SE 羽田空港の賑わい

久美N「父の法事に出るために、私はこの週末、実家のある札幌に戻る」

SE 飛行機・機内のアナウンスなど

久美N「飛行機に乗るといつも、大学進学のため北海道を後にした日を思い出す。あの時は寂しさと不安よりも安堵感の方が強かった。十八歳の私にとって故郷は逃げ出しなくなるぐらい息苦しい場所でもあった」

SE 飛行機・着陸音

SE JR札幌駅西口の雑踏

文江「久美、久美！」

久美「お母さん、来てくれたんだ。いいって言ったのに」

文江「たまにはアンタとご飯でも食べようと思ってる」

SE 地下街の雑踏・二人歩いている

文江「なにか食べたいものあるかい？」

久美「うーん、なんでもいいけど、まだ時間が早いから少し歩きたいわ」

文江「じゃあ大通りにでも行ってみるかい？
リラの花がきれいだよ、今」

久美「大通り公園か、いいね」

SE 大通り公園の雑踏・噴水の水音

久美N「北国の初夏の青空に、紫色のリラの花と、すつきりと立つテレビ塔が鮮やかに溶け合っていた」

久美「変わらないね、ここは」

文江「オリンピックのあと札幌の街は随分変わったけど、ここだけは昔のまんまだねえ。久美は覚えているかい？五輪のこと」

久美「あまり覚えてないわ。まだ小学校に入る前だもの」

る前だもの」

文江「あれからもう40年だって。早いねえ。

アンタ、いくつになったの？」

久美「45歳、アラフィフよ」

文江「アラフィフかい。私はアラ、アラ……（笑いながら）婆さんになるわけだ」

久美「ほんとね。びっくりした。どこからどう見ても婆さんで」

文江「ちつとも帰ってこないくせに、いやなこと言うのねえ、この子は（笑）」

SE 風が梢を鳴らす

文江「久美、とうきび食べるかい？ちよつと待ってて、買ってくるから」

SE 鳩の鳴き声・噴水の音

久美N「とうもろこしを買っている母の背中を見ていたら、不意に子どもの頃のことを思い出された。ねえお母さん、あの頃どうして今のように笑ってくれなかったの？いつも不機嫌な顔で私に背を向けていたのは、なぜだったの？」

SE 玄関の開閉音

文江「ただいま」

SE 足音近づいて

由紀「おかえりなさい。久美さん、いらっ
しやい」

久美「お義姉さんご無沙汰してます。三日間
お世話になります」

由紀「いやだ、自分の家でしょ。さ、上がっ
て上がって」

SE 廊下を歩く三人

久美N「父が亡くなり、建て替えられたこの
家で、母は兄の家族と一緒に暮らしている」

久美「これ、お土産です。一周忌には来られ
なくてすみません」

由紀「あれー気にしないで。今お茶入れるか
ら」

SE 湯呑のお茶を入れる音

文江「孝之はまだ？」

由紀「残業で遅くなるって。健太はバイト」

久美「健ちゃん、元気？」

由紀「バイトばかりやってる。折角入った
のに留年しないかってひやひやよ。奈美ち
ゃんは元気？」

久美「ええ何とか……」

文江「無理して来れなかったのかい？お葬式
にも来なかったし。もう何年も奈美の顔見
てないよ」

由紀「遠いし、若い人は色々忙しいっしょ。
ねえ」

久美「ええ、まあ……お茶、いただきます」

SE お茶をすする

由紀「お義母さん、明日のお寺さんに用意す
るもの、これでいいですか？」

文江「え、どれどれ」

由紀「ちよつと見てもらえますか？」

久美N「逃げ出すまでもなく、もうここは私
の居場所ではなかった」

SE 襖を閉める音

文江「疲れたかい、久美」

久美「うん、ちよつと」

文江「今日は早く寝たほうがいいよ」

久美「うん、そうする。おやすみなさい」

SE 電気を消す音

久美N「その晩は母と枕を並べて寝た。私は
疲れていたけれど、なかなか寝付けずにい
た」

久美「お母さん、もう寝た？」

文江「起きてるよ」

久美「少し話そうか」

文江「眠れないのかい？アンタ小さい頃から
そうだったねえ。眠ると怖い夢を見るから
って」

久美「怖い夢……ねえ、路面電車ってまだ走
ってるの？」

文江「市電のことかい？それならまだあるよ」

久美「どの辺り？」

文江「四丁目から石山の方通って、すすきの
までさ」

久美「昔よく一緒に乗ったよね」

文江「そう、だったかい……」

久美「私ね、今でも時々夢に見るの、その時
のこと」

文江「どんな、夢……？」

久美N「心なしか母の声が震えていた。私は、
言えなかった。あの夢の話を言ってしまった
たら、少しだけ解けてきた母と私の心が、
また凍ってしまいそうな気がしたから」

久美「電車を降りたところに山が見えて、白
い大きな建物に入ったわ。壁に鳩の絵が描
いてある。あれはどこだったんだろう」

文江「さあ、昔のことはみんな忘れちゃった
よ……母さん、もう寝るよ。久しぶりにた
くさん歩いたせいか少し疲れた」

久美「あ、うん、ごめんね、変な話ししちゃ
って」

文江「小玉、消してくれるかい？」

久美「おやすみなさい」

SE 電気を消す音

久美N 「暗闇の中でも、私に背を向けた母の肩が小刻みに震えているのが分かった。母は確かに何かを隠していた。あの夢と結びつく何かを」

SE 読経 (FO)

孝之 「悪かったな。わざわざ遠くから」

久美 「ううん、私こそ、母さんのこと兄さんたちに任せきりで。悪いと思ってる」

孝之 「仕方ないさ、長男だからな、俺は」

久美 「感謝します」

孝之 「そんなことよりたまにはお袋に顔を見せてやれよ。お袋、なんだかんだ言ってもやっぱり実の娘がいいんだぞ」

久美 「そう、かしら……」

孝之 「そうだよ、そうに決まってるだろ」

久美 「ね、兄さんは小さい頃、市電に乗った記憶ある？」

孝之 「市電ってあの、上走ってるのか？さあ、記憶ないなあ。家(うち)は場所柄ぜんぜん縁がないからな。それがどうした？」

久美 「ううん、なんでもない。気にしないで」

孝之 「久美、今日はこの後どうするんだ？」

久美 「学生時代の友達と会ってくる」

孝之 「そうか。ゆっくりしてこいよ」

久美 「うん、そうするわ」

久美N 「その時私は、誰にも言わず一人で母と私の遠い過去に会いに行こうと決めていた」

SE 4丁目交差点の雑踏
路面電車走り出す

久美N 「午後、私は市電の中にいた。ほんのわずかな記憶だけが頼りの、あてのない旅の始まりだった」

SE 走っている電車、その車内

久美N 「沿線に住む住人だろうか、お年寄りや小さな子供連れの若い母親。札幌に一つだけ残っている路面電車は、ノスタルジックで優しい音を響かせながら進んでいった」

SE 電車内、停車駅のアナウンス等

久美N 「四丁目を出発した市電は中心街のビジネスゾーンを抜けると、住宅地を南に進んで行く」

久美 「あ、あの山……」

久美N 「流れる景色をぼんやりと眺めていた私の目が前方のこんもりとした緑をとらえた」

SE 電車が停留所に止まる。

久美 「お、降ります！」

SE 出口に駆け寄りお金を入れる
久美が降り電車が去っていく。

SE 梢を鳴らす風

久美N 「目の前に広がる街並みには、当然のように高層のマンションや新しい住宅、お店などが続いていた」

久美 「焦って降りてはみたけれど……とりあえず歩くか」

SE 行き交う車・横断歩道の音など

久美N 「あきらめかけていたその時、目の端に高い煙突が飛び込んできた」

久美 「あ、これ、覚えてる……」

久美N 「赤いトタンの大きな三角の屋根から煙突が空に伸びていた。セピア色の思い出と重なる懐かしい佇まいの建物は『ひさご湯』という風呂屋だった」

久美 「やっぱり私、この辺りに来たことがあったんだ」

久美 「やっぱり私、この辺りに来たことがあったんだ」

S E 遠くから市電の音・心臓の鼓動

久美N「心臓が早鐘のように鳴っていた」

S E 市電近づいて、大きくなる鼓動

久美「ひっ！」

S E 久美その場にしゃがみこむ
電車通り過ぎて

千恵子「大丈夫？」

S E 行き交う自動車の音

千恵子「あなた、大丈夫？」

久美「（我に返って）だ、大丈夫です」

久美N「見ると、上品そうな初老のご婦人が
私の肩にそっと手をかけてくれていた」

千恵子「顔色が真っ青だけど」

久美「ちよつと、気分が悪くって」

千恵子「少し休んでいかれる？うちすぐそば
だから」

久美「いえ、大丈夫です、もう……」

S E 久美、立ち上がるがよろけて

久美「あ……」

千恵子「ほら、危ない！無理しちゃダメ」

S E ティーカップに紅茶を注ぐ音

久美N「結局、私はその親切に甘えることに
した。家は古いがきちんと手入れされてい
る美しい洋館だった。庭に面したバルコニ
ーで暖かいミントティーをごちそうになり
ようやく私は一息ついた」

久美「美味しい……」

S E カップを置く音

千恵子「古い家でしょう」

久美「いえ、落ち着きます」

千恵子「両親が住んでた家なの。私はずっと
東京にいて、定年になって帰って来た時に
はもう誰もいなくって」

久美「それからずっと……」

千恵子「そう、ずっと一人。孝行したいとき
に親はないって言うけれど、ほんとね」

久美「はい……」

千恵子「あなた、ご両親は？」

久美「母がいます」

千恵子「そう、じゃあ大切にしないと」

S E 小鳥の声

久美「あの、昔、この辺りに大きな白い建物

はありませんでしたか？壁に鳩の絵が描い
てある」

千恵子「鳩の絵？」

久美「子供の頃の記憶なんで、あやふやなん
ですけど……」

千恵子「柵橋病院のことかしら。そうだわ、
確か壁に鳩の絵が描いてあった」

久美「病院？」

千恵子「今はもうないけれど、私は学生の頃
はよく遠くから患者さんが診察に来ていた
の。めずらしかったからその頃」

久美「めずらしいって？」

千恵子「そうね、今でいう神経内科って言う
のかしら、そういう科があったのよ」

久美「神経、内科……」

千恵子「いいお医者さまがいらしたそうよ」

S E 梢を鳴らす風。

久美N「その時、私の記憶の中のパズルが一
気に繋がった。繰り返し見るあの嫌な夢の
謎も……」

S E 襖を閉める音、畳に座る二人

文江「やれやれと。でも今日は無事に済んで
よかったよ、お父さんの法事」

久美「お母さん……」

文江「ん、なんだい？久美」

久美「お母さん、私が子供だった頃、ずっと

ふさぎ込んでいたわよね」

文江「なに言い出すかと思っただら。忘れたよ、そんな昔のこと」

久美「私には昔のことじゃないの」

文江「どうしたのよ、いったい」

久美「今日の午後、市電に乗ったわ」

文江「友達に会いに行くって……」

久美「私、小さい頃やつぱり、あの場所に行つてたんだね、お母さんに連れられて」

文江「あの場所？」

久美「柵橋病院。壁に鳩の絵が描いてあつたでしょう」

文江「アンタ、よくそれを……」

久美「今はもう無いんですって、あの病院」

文江「どうして、そんな昔のこと、ほじくり返すようなことするんだい」

久美「自分でも分かんない……ただお母さん気づいてた？私ね、小さい頃ずっと我慢してたんだよ。お母さんが具合悪そうにしていたら、わがまま言わないようにって、心配かけないようにって」

文江「なんとなく気づいていたよ。小さい頃からアンタはぜんぜん手のかからない子だった。でも、どこか冷めたところのある子で、私にはなつかさなかった」

久美N「ポツリポツリと振り絞るように母が話し始めた。私が子供だった頃、心を病んでいたこと、学校が早く終わる私だけを残して午後の診察に通っていたこと、私が高

校に通う頃にはすっかり良くなって薬も必要なくなっていたことを」

久美「もっと前に話してくればよかったのに」

文江「今さらアンタに私の過去を話したってしようがないと思つて」

久美「奈美ね、もうずっと学校に行つてないの」

文江「どういうこと？」

久美「引きこもりなの、あの子。今もね、過食と拒食を繰り返して、手首切ったこともあるわ」

文江「どうしてそんなことに……」

久美「初めは些細ないじめがきっかけだったの女子ばかりの学校で、ずーっと同じ環境でしょう。あの子ばかりじゃないの、そういうの」

文江「かわいそうに、奈美……」

久美「みんな乗り越えていくのよ。でもあの子はできなかった……どうしてだと思つて？」

久美「私のせいなの。私が、ちゃんとあの子のことを愛してやれなかったのかも、だからあの子……」

文江「そんなに自分を責めなくても……親はみんなそうさ。子供のこと思つて、みんな」

久美「違う、そうじゃない！」

文江「久美……」

久美「帰りの路面電車に揺られながらずっと考えてた。そして分かつたの」

久美「お母さんが私をちゃんと愛してくれなかつたから、だから私もあの子を愛せないの！お母さんのせいよ！」

文江「久美……」

久美「どうして小さかつた私を道連れに死のうとしたの？走ってくる市電に飛び込もうとするなんて……」

SE 頬を打つ音

久美N「母の目が涙で濡れていた」

文江「あの日、気が付いたら久美を連れてふらふらと市電の線路を歩いていたの」

SE 路面電車だんだんと近づいてブレーキ音と警笛

文江「警笛の音で我に返つて、夢中でアンタを抱えて脇に退いて……」

久美「怖かつたんだよ。すごく私……怖かつた。だからずっとその時のこと夢に見て」
文江「覚えていると思わなかつたよ。許しておくれ、久美……」

久美N「母は泣いていた。腰が曲がって小さくなつて髪も真っ白になつて、おばあちゃんになつてしまった私の母が……」

久美「ごめんね、ごめんなさい。ほんとうは

こんなこと言うつもりじゃなかったの……
何言ってるんだろう私、いい歳をして」

SE すすり泣く声

久美「こんなんじや、いつまでたっても奈美の親になんかなれやしないね」

久美N「その時、私は静かに抱きしめられるぬくもりを感じた。抱きしめたまま、ずっと背中をさすり続けるその手は、まぎれもなく母のものだった」

久美「お母さん……」

文江「久美……」

久美N「その晩、またあの夢を見た」

SE 路面電車の走行音（近づいて）

SE ブレーキ音・警笛

SE 離れていく路面電車

久美N「夢の中の小さな私は母の腕の中にしつかり抱きしめられながら、遠ざかる電車を見送っていた」

SE 小鳥の鳴き声

久美N「私ははつきりと気づいた。あの時、母は死のうとしていたのではなく、私と一

緒に生きようとしていたのだ」

SE オルゴールの調べ

久美N「そして、一人つきりで膝を抱えたまま
まうずくまっている奈美のことを思った。
私は……私はあの子のことをちゃんと抱き
しめてやっていたのだろうか」

SE 空港のアナウンス

久美「じゃあお母さん、私行くね」

文江「身体に気をつけるんだよ。奈美のこと

……」

久美「わかってる。また来るね。今度は奈美
を連れて」

SE チェックインをせかすアナウンス
歩き出す久美の足が止まる

久美N「手荷物検査の向こう、いつまでも立
ち去らない母がいた。そして小さく微笑ん
で頷いてくれたように見えた」

(了)